



円覚

横田管長のお話
恩に報いる

令和4年 うらぼん号 338号



円覚 338号(春ひがん号) 令和4年6月23日
編集発行 円覚寺派宗務本所
〒247-0062 鎌倉市山ノ内 409
TEL : 0467-22-0478
FAX : 0467-23-3027

円覚寺ホームページ



<https://www.engakuji.or.jp/>



円覚338号 目次

横田管長のお話

「恩に報いる」	1
管長のページ	8
信心ことはじめ⑦	10
鈴木大拙の言葉と生涯(七) / 蓮沼 直應	12
直感的に正しいと感じる心 [前編] / 桜井 竜生	16
円覚寺の至宝③	20
精進料理レシピ / 藤川 譲治	22
お盆のはじまり / 横山友宏・由馨	24

表紙・裏表紙写真 / 円覚寺派宗務本所

横田管長のお話

恩に報いる

思えば令和二年から、新型コロナウイルス感染症が蔓延することによって、世の中がずいぶんと変わりました。もう三年目にもなると、マスク姿もあたりまえのようになってしまいました。コロナ禍という言葉も定着しました。そのコロナ禍の始まりの頃に、私にとって大恩のある二人の師が亡くなりました。

一人は、円覚寺派前管長の足立大進老師であり、もうお一人は私の故郷和歌山県新宮市



の清閑院前住職、後藤牧宗和尚であります。前管長には円覚寺に来て三十年にわたりご指導いただきました。後藤和尚さまはまだ小学生だった私に坐禅の指導をしてくださいました。前管長のお申いを勤めるのは、私の当然の役目でありますし、清閑院の後藤和尚からも、生前ご本人から葬儀の導師を頼まれていました。まだお二方がお亡くなりになった当初は、それらの葬儀もすべて行えるであろうと思って日程も組んでいました。

それが、一昨年はじめての緊急事態宣言が出て、全国の学校は一斉に休校になり、世の中はガラリと変わりました。お二方のお葬儀も十分に執り行うことができなくなりました。僧侶の葬儀は、密葬と津送しんそうの二回行います。津送は一般に言われる本葬にあたりません。前管長の津送は、本来であれば有縁の僧俗大勢の方によって行われるのですが、円覚寺山内の和尚さま方のみで納骨法要を行いました。後藤和尚の津送もまた、私が和歌山まで行くことができず、地元和尚さま方のみにて行われたのです。

という気運もあって、どうにか円覚寺においては、有縁の管長さま老師さま方、ご尊宿方を招いて前管長の三回忌を勤めることができました。

清閑院の後藤和尚さまの三回忌も紀州に赴いてお勤めすることができました。そのどちらも、ご遷化以来気にかかっていたことが、ようやく一区切りできたと安堵しています。

新宮市の清閑院の三回忌に赴く折に、那智勝浦町にある大泰寺を訪ねることができました。大泰寺は、臨済宗妙心寺派の古刹であり、岐阜県伊深にある正眼寺に僧堂を開導された雪潭老師の出られたお寺でもあります。

伊深の正眼寺の道場は、全国にある修行

道場の中でも「鬼叢林」と恐れられるほど厳しい修行で知られています。雪潭老師は峻厳しんげん一徹、そのあまりの厳しさから「雷雪潭」とあだ名されたほどです。

雪潭老師は紀州太田のお生まれで地元の大泰寺で出家されました。修行して隠山いんざん禅師のお弟子の棠林たうりん禅師の法をお嗣しぎになっっています。

三十代で大泰寺の住職となり十年間を紀州で過ごされました。雪潭老師は四十二歳で、後の瑞龍寺僧堂になる天沢僧堂に招かれますが、その頃には太田川の河口に船を入れるのが困難なために海難事故が多





前管長 足立大進老師 三回忌法要にて

かったようなのです。そこで雪潭老師は川を見渡せる山の上に、法華經の經文を一字ずつ石に書いて埋めて経塚を建てたそうです。

地元でも忘れかけていたその経塚が再発見されたということを何年も前に地元の新聞で知って、感動したのでした。後年雷雪潭とまで恐れられた老師ですが、地元を離れるに当たって海難事故が多く、地元の漁師さん達の深い悲しみを思ったのでありません。

大切なお父さんを亡くした人や、自分の大事な跡取り息子を亡くすなどして、悲嘆に暮れている村の人々の、その悲しみを老師は心から受け止めて、一人太田川原の石を拾ってきては一字一字写経して山中に埋めて、亡くなった方の冥福と残された人

の幸せを祈らずにはいられなかったのでしょう。誰も見ていないところで、人の悲しみを自分の悲しみとして一字一字お経を石に書き山に埋められた老師のお慈悲を思います。

大泰寺を訪ねて今のご住職から雪潭老師の貴重な資料を頂戴しました。「かみなり雪潭」という、五十年前の雪潭老師百年忌に出された本でした。

そのなかには、雪潭老師の伝記や逸話が載せられています。そのほかに『父母恩重經』を講義されたものが載っていました。『父母恩重經』は文字通り父母の恩の重いことを説いたお経です。「かみなり」と恐れられた禅僧が、『父母恩重經』を説かれたのにも驚きました。

ご生前によく講義されたということでもあります。そのなかに、こういう一節がありました。

「支那の聖人孔子さまの言葉だったか、父母を色養するとあったが、色養とは顔色で親孝行ができるということじゃあ。

その意味は、親はその子が、何もうまいものを持って来なくても、笑顔でやって来るだけでもうれしいということじゃあ、金持ちや地所持ちにならなくてもよい、夫婦・親子が仲よく暮らすということが、倅じゃあ」とありました。

「色養」という言葉はあまり聞き慣れませんが、諸橋轍次先生の『大漢和辞典』には、「親の顔色を見、其の心を察して事（つか）えること。一般に、常に和悦の顔色を以て父母に奉養

すること」と解説されています。もとは『論語』にあります。

『論語』に「子夏、孝を問う。子の曰く、色難し。事あれば弟子其の勞に服し、酒食あれば先生に饌す。曾ち是れ以て孝と為さんや」とあります。

岩波文庫の金谷治先生の訳を参照しますと、「子夏が孝のことをおたずねした。先生はいわれた、顔の表情がむづかしい。仕事があれば若いものが骨を折って働き、酒やごはんがあれば年上の人にする、さてそんな「形のうえの」ことだけで孝といえるかね」という意味ですが、註釈には「顔の表情―親の前でのやわらいだ顔つき。心の中に本当の愛情があつてこそできる。それでむづかしいといった(新注)」と書かれています。



親の前ではいつも穏やかな表情でいることが孝行だという教えなのです。

食べ物などを差し上げることよりも、親の前でいつも穏やかな表情でいることが難しいのです。

雪潭老師は、幼くして父を亡くして、お寺に預けられています。不憫な境遇ですが、恐らく親を悲しませまいと、幼少の頃から表情にも気をつけておられたのかと思えました。

自分の不遇を嘆くよりも、まだ幼い子を手放さざるを得なかった母の心情を察していたのではないかと思ったのです。幼い頃から、父母への深い愛情を持ったのが雪潭老師だと思ったのです。

親の恩に報いることは容易ではありません

んが、まず第一に笑顔で接することであり、仲よく暮らしている様子を見てもらうことです。

親がご存命ならば、帰省して元気な様子を見てもらい、笑顔で接し、お亡くなりになっていれば、お墓にお参りして元気な様子を見てもらうことです。たとえお墓に行くことができなくとも、見てもらっていると思つて手を合わせ、元気で明るく過ごすことが第一であります。

恩師の恩に報いるのも容易ではありません。法要を勤めてホッとしましたものの、それで十分ではありません。それぞれが、それぞれの立場でできることを行うことであります。精一杯のことを勤めていけば、きっと喜んで見守っていてくださるはずであります。